

# 六 花 4



俳句雑誌りっか  
2017 (平成29年)  
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

寒 鯉

かん  
閑

寒鯉にすさぶ心を置きにけり  
日かげりに蕾を挙げし冬堇  
青踏の足裏に城の土墨あり  
吾顔を削ぎつつ走る春の水  
薄氷を指で穴開けたるをみな  
夜遊びの猫に点けおく春炬燵  
束の間を梅に目白の遊びけり  
オリオンの座低くして寒もどり  
いかなごの釘煮のにほひせしとのみ  
他人の垣覗く沈丁花はまだか

前をゆく人にねぢれし雪柳  
城山の生木くすぶる春暖炉  
一粒の火種をここに冬苺  
青石に靴の響きや春の風  
莊川を遠く庄川桜かな  
草萌えの毬の懸かりを囲みけり  
日輪の中に椿の浮かびけり  
笹越しに見し隠沼の残り鴨  
一枝ずつ花もらひたる破顔かな

雪嶺抄 三ヶ日 笹村 政子

新聞にはじまる夫の三ヶ日  
正月凧上がりきつたる武者絵かな  
懐手といて鳥居をくぐりけり  
七草の旅をしたたる水あをし  
島陰にどんどの煙あがりけり  
ふたたびの絵島が浦や冬かもめ  
奉納の明石大鯛初戎  
浦町の短き参道初戎  
下りてより影と歩ける寒雀  
日脚伸ぶ夫の初恋嘶聞く

# みどり児の初湯に手足もつれけり 住田千代子

幔幕の地紋透きくる初明かり

亀甲の松の膚の淑気満つ

晴ればれと正月凧の上がりけり

初凧の湾に華やぐ大漁旗

みどり児の初湯に手足もつれけり

みどりごのはつゆにてあしもつれけり すみだちよこ

初湯を使わそうとしたら元気な赤ちゃんは手足をばたばたさせ、まるで纏れているようだという。赤ちゃんばかりか、親や祖母まで、赤ちゃんを落としては大変と緊張して手足が纏れるのである。生命力溢れる嬰兒ならばこそその目出度い初湯。

六甲

# 雪解けの溢れてをりぬ加賀の国

浜田久美子

ゆきどけのあふれておりぬかがのくに はまだくみこ

節分や無口な父の鬼は外  
雪解けの溢れてをりぬ加賀の国  
寒鰯の九谷の皿に堂々と  
鰯大根山中塗の朱の椀に  
時雨るるや朝からシヨパン聞いてをり

百万石と謳われた加賀は今の石川県。金沢や山代・山中など芭蕉にもゆかりが深い。城下町のたたずまい、兼六園など二つの流れをたたえ、伝統工芸も発達。立山・白山・奈良岳の雪解水が室生犀屋ゆかりの犀川や友禅流しの浅野川など主として加賀一國に溢れているとしたのがいい。

六甲

# 雪卿集

折鶴

佐津のぼる

折鶴をはばたかせたき初御空  
生きすぎし互ひを笑ひ初電話  
戸ぼそにて二日はやくも商へり  
小屋深く犬うづくまる霜夜かな  
青首を掴みどころに大根引く

雪の朝

出口

誠

少年がスコップ持ちて雪の朝  
母親がほうきを持ちて雪の朝  
積雪に足をとられて転びけり  
寒の夜の俳句作りのきりもなや  
目も耳も老いを感じて春隣

# 雪卿集

冬の川

永田万年青

塩昆布七草粥に添へてあり  
元朝のほの暗き坂のぼりけり  
絶え間なく岩を禊げる冬の川  
冬川の岩を縫ひつつ白濁す  
丹の橋の擬宝珠に射せる冬日かな

除夜詣

升田ヤス子

芹摘むや大揺れに来る一両車  
浮寝鳥波過ぎたれば元の位置  
天水に篝燃えゐる除夜詣  
鐘の音にわびすけ朱唇ひらきけり  
落椿篝の薪の隙にかな



# 雪樹集

菰 卷 廣畑育子

菰卷を終えしぜかりの分厚さよ  
窓下を夜番の鐘の過ぎ行けり  
古家の高くに咲ける枇杷の花  
みやげ屋ののれんを煽る冬の風  
外濠の風に光りし柳かな

女 正 月

赤松有馬守破天龍正義

御招ばれに初湯に入りて戻りけり  
糠床をまぜてをりけり女正月  
餅黴やあの懐かしきひびの割れ  
凄みある顔ぶれ並ぶどんど焼き  
雪中に曖昧模糊の受け答

# 雪樹集

白い息

溝渕弘志

早朝に改札通る白い息  
バス停にマスクばかりが集ひをり  
後輩に自慢話とおでん酒  
てつちりに白子浮んでをりにけり  
酒あればこの冬何か起こりさう

七種粥

谷口一献

酒の気の漸く抜けし七日かな  
うす味の七種情の薄からず  
七草粥好きでもなくて三杯目  
七草にやつと二人の暮らしかな  
酔ひほのと七種粥の湯気ほのと

# 蛭雪譚

六甲選

二十九年四月号鑑賞と随想

「詩より詩作の瞬間（モメント）を愛す」と室生犀星だったか萩原朔太郎が言った（それを書いていた手帳が手許にないのであいまい）。俳句も同じで、出来上がった句より句が向こうからやってくるのを待つ間を愛しているのかも知れない。我々は月に一度、同じ場所に行つて同じ物を見て句を詠む。飽きもせずそれを十年も続けていられるのは、新しい出会いの瞬間に巡り会いたい。そういうことだろう。主宰は自らつくるより六花の作家たちの句を読んで、感想をここに書くのも弟子を愛しているがゆえに、寝食を忘れ机に向かう。「おうどんが伸びるじゃないの!」と家内が怒鳴るまで気付かずにいることもしばしば。とにかく弟子達が主宰より力があるのだから、主宰が何をほざいてもめげないのである。仔犬がライオンに吠えつくようなものと同じ。今月も思い切り咆えてやろうと思う。覚悟は要らないから、参考にはして欲しい。などと弱気な事を……と笑うべからず。弟子などと不遜なことを言うが……。

菰巻を終えしばかりの分厚さよ

廣畑 育子

菰巻は樹木の害虫が寒さを凌ぐため潜り込むように幹の途中に菰を巻く。その菰は春先には外して焼き害虫駆除をする。一冬過ぎたら菰はかなり朽ちて薄い。巻き立ては藁が新しく分厚い。そこを詠んだ。虫はよもや畏であるとは知らず冬を安眠して過ぐす。「気をつけよう甘い言葉と暗い道」。だったが今は「気をつけよう甘い

言葉と民進党」だとかに皮肉ってあった。育子の若い頃は菰のような畷を仕掛けていたという話があるのかなとか。主宰でもいちちころで畷にかかるだろう。



六りっひしやう花集



平居 滯子

この家を終の棲と注連飾る  
淑氣満つ天皇陵と対峙して  
若冲の鶏の氣迫の初曆  
浮寝烏埴輪の沈む壕の縁  
古墳群巡る細道梅探る

江見 巖

虎落笛亡き父からの返事かな  
柎挿す棘より邪氣の入り込む  
春会式花を添へたるチンドン屋  
種袋今にも芽吹きさうな種  
啓蟄や鉛筆すべてキャップ入り

大内 幸子

投函へ一句拾ひて薺徑  
箸袋ポチ袋にと初仕事  
雑然の机上もめでたし大初日  
天気図は縦縞ばかり寒厳し  
雪日和共通一次避けられず